

## 養蜂 3 年目の記

藤田 成美

ダークトーンのシックな衣装を着込んだ、カーニオラン系の一群がわが家にお目見えしたのは、3年前（1993年）の早春であった。

それまで、小生はミツバチを飼育したことはなかったが昆虫の生態には興味があり、「ミツバチ科学」誌も7年ほど前に購読しており、その頃、20年間の養蜂について書かれた田口迪太郎氏の一文（本誌11巻1号、1990）を読み、「難しいがおもしろい——」というひと言に頷けるものがあり、「難しいのを承知の上で」神戸から購入した次第である。松戸市内にも養蜂家は数名存在するが、近親交配の悪影響を考慮して遠方の種を選んだ。

今日までの結果を結論から先にいうと、群数、採蜜量ともに年々、ほぼ倍々ゲームで増加している（初年度2群で現在8群）。

カーニオラン種は温順で低温に強いが、暑さには若干弱いことが飼い始めてみてわかった。拙宅の庭に終日、陽が当たっていることも影響したようだ。購入した年の5月、数個の王台ができ、人為的に分割して新たに3群、新女王蜂群として分家させることができた。やがて蜂の数が増え、順調に推移しているように見えたが、梅雨が明けて盛夏になるや、その新3群ともに女王蜂が巣箱から這い出し、同時に働き蜂達が一斉に空中に飛び出して巣箱が空になるという、分蜂とは全く異なる異常な事態が繰り返し発生した。この時、新女王蜂は3匹とも（受精確認後、翅を切っておいたために飛ばず）巣箱の周辺を這い回り、指先に軽くつまんで巣箱の中に戻しても、すぐまた這い出す始末だった（神戸から来た母女王蜂群に異変はなかった）。察するに新3群とも、何かの病気と暑さに負け

つつあるようだった。やがて新女王蜂は3匹ともどこかに姿を消してしまい、残された働き蜂達は生きる目標を失ったかのように「遊軍」となって気ままに南の畑の上空を飛び回っては再び自分達の巣箱に戻ってくるということを繰り返していた。ある時、近所の農家の人が数名、畑で作業中に頭上で蜂達が乱舞したので全員が驚いて頭を抱えながら家の方へ逃げ出すと、蜂達もゾロゾロ後を追って農家の入口まで、集団で押し掛けるといった奇妙な行動をとった。その時蜂達は人間を刺すようなことはまったくなかったというが、それにしても数万匹の蜂が黒雲のごとく空中を追尾して来ることはまさしく仰天モノであったろう。推察するところ、蜂達は人間に興味を抱いて（あるいは衝動的に？）人間の後を追ったらしい…。自宅の庭でも何回か私は目撃したが、その都度、蜂達の「虚ろな心」を感じた。この時の蜂達の心理状態は病気に由来する死の予感が、やがて虚無感ないし寂寥感となって圧迫する余り、精神を崩壊させつつあったように思う。カーニオラン達が恭順で不平をいわず（態度に出さず）善良で穏やかな働き者であっただけに、この変わり様は心を痛ましめるものであった。

こうなった理由のひとつは、一群内だけの交配の所為であると思い即刻（その年の夏）ニュージーランド産のイタリアン種を一群（神戸を避けて）名古屋から取り寄せた（なお、脱出飛行を繰り返していた3群の働き蜂達は徐々に数を減らしていき、秋の草花が咲き出す頃にすべて滅び去った）。

かくして初めての冬を迎えたが、カーニオラン（母女王群）、イタリアンの両者ともに無事その冬を乗り切った。再び春を迎えると蜂達は急速に数を増し、春の花が終了する頃には3段群に（両者とも）なり王台も双方合わせて10個程できたため、人為的に分割し、その後の新女王蜂の出現から受精は蜂自身の「自主管理」に委ねた。その結果、両種から各一群ずつではあるが新女王蜂群が得られた。新女王蜂の色調は、イタリアン種が母女王蜂と同等の明るい単一色であるのに対し、カーニオランの方は母女

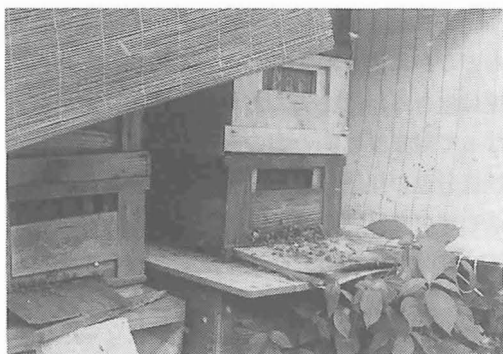


図1 わが庭のミツバチ飼育状況

王蜂が純黒なのに娘女王蜂の方は黒と薄黄の縞模様で、胴の先端部に僅かながら純黒を残すにとどまった。

この2年目の春に蜂達は急増したが、その理由は購入した初年度に全く採蜜しなかったためのように思う。2年目の夏の始め、栗の花が終了する頃（分離機で）初めて採蜜したが、一斗缶でたちまち3個分になった。この内の2缶は蜂（4群）の越冬予備として残し、残った1缶を昨夏、迷惑をかけた農家に「お詫び」として持って行った。数日後その農家から「お返しに」と、どっさり野菜が届けられたが、その時、「去年は栗の実が大豊作で…、多分お宅の蜂さんのお陰のようです」とニコニコ顔である。こちらはわが蜂が恨まれているのでは、と思っていただけに逆に感謝されていることが判って安堵し、「蜂の方も栗の花から蜜をもらって喜んでました…」と冗談を言って共に笑い合い、以後その農家の皆さんとはすっかり仲良しになった。さらに近くの観光梨園から大量の梨が小生の許へ届けられたので理由を聞くと、「弟の方からお宅の素晴らしい蜂蜜を分けて貰いました…」と言ったので私も「ああ、ご兄弟でしたね」と思い出してから「ところで梨の花にもミツバチは行っていますか？」と尋ねると、「はい来れます、一杯来れます」と満足そうに頷いて、「その授粉作業代です」というように持参した段ボール箱を置いて帰って行った。ミツバチが養蜂生産物以外に、野菜や果物まで人間にもたらすとはまったく予想外であった。

やがて梅雨が明け、再び暑さが厳しくなると同時に暑さ対策として巣箱上に日除けの覆いを

施し（図1）、通風を良くするために継箱を各群に追加した（2段群を3段とし、3段群は4段としていずれもその最上段に空巣を入れておいた）。さらに巣箱の前後の窓を（夏の間）少しずつ開けた。また巣箱群のほぼ中央に給水用の鉢を置き、常時水を張っておいた。以上の他、湿気を防止するために巣箱を直接、地面に置かず（何らかの台上に載せる）高床式とした（なお、巣箱の前の平板は流蜜期の蜂同士の衝突緩和用に置いてみたが、夏の涼み台や冬でも日向ぼっこに活用しているため、年中付けてある）。

この2年目の夏は猛暑だったが、幸いにカーニオラン（2群）達に異変は生じなかった。全4群が競い合うかのように早朝から活動を続け、夏の終わり頃、秋の花が咲き出す前に再び大量の蜜が貯まった。この時期、周辺には春の頃のような花々はもう見当たらないが、当地の場合はさし当たって3か所、夏の蜜源があることを確認している。

## ヤタイヤシとミツバチ

まず第一は当家の玄関に植えてあるヤタイヤシ（*Butia yatay* Becc.）2本である。

日本では「ヤシ蜜」という名称も現物も殆ど見聞することはないが、タイ国では百年も昔からココヤシ林で養蜂を始めていたし、ニッパヤシも蜜源植物として報告されている（Wong-siri, 1989, 本誌10巻4号）。さらに Sudrajat and Sulistianto (1993, 本誌14巻3号)にも、ココヤシ、サトウヤシが養蜂植物として紹介されている。

ヤタイヤシの場合もかなり蜜が出るらしく、開花と同時にミツバチが飛来する（図2）。この時は花外蜜腺からもすでに流蜜しているらしい。さらに花が満開になると蜂の数が一気に増え、数十匹の団体が大きな花序の内外で楽しい羽音とともに花蜜や花粉を集める姿が認められる。開花の時期は南関東で例年、ニイニイゼミが鳴き出す6月下旬で、夏の間、数回にわたって大きな穂状花序に数百の星状の小花を持った繊細で優美な姿を見せてくれる。花の期間が数日と短いのが難点だが、夏の花蜜の少ない時

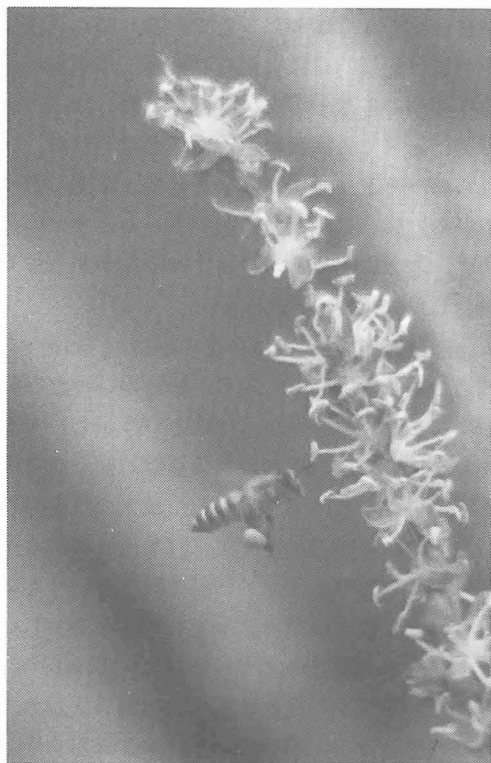


図2 ヤタイヤシの花に舞うミツバチ

期だけに訪花して蜜を吸っている嬉しそうな様子や、うっとりした法悦の境に在るかのような姿態を花の咲いている期間中は連日見ることができる。夏の陽光の溢れる中、リズムカルな翅音に乗って花をおとなうミツバチの全身は生命の輝きを体現しているかのようである。

### ユーカリとミツバチ

夏の花の二番手はユーカリ（フトモモ科）である。この樹は今からちょうど四半世紀前に松戸市の樹に指定され、市内各所に約2,800本の幼木（約十種類）がオーストラリアから運ばれ植樹されたもので、最も多い種は *Eucalyptus viminalis* の約1,500本、次いで *E. camaldulensis* の476本である。この両種ともに花蜜を出すために養蜂に適し、前者の花は白、蜜は琥珀色で独特の甘さがあり、後者はクリーム色の花に黄金色の蜜で風味が大変よいという（「未来の植物資源ユーカリ」西村弘行編）。

ユーカリは樹高があるためか、その花を見る機会がなかったが、ミツバチが当家に来たことと、一度この花を見たいと思っていた事由で、

ユーカリの多い公園を中心にかなり熱心に探し回った。6月下旬のある晴れた日、やっと *E. camaldulensis* としき花の咲いているのを発見した。家から直線距離で2km北（小金原団地）にあった。花は直径が2cm前後の半球状で、よく見るとその花のマリは直径4~5mmの小さな花の集合体である。柳の枝状の細くてしなやかな枝葉の陰に薄黄色のエキゾチックな小花が、甘い芳香を放ちながら夏至点を過ぎたばかりの太陽の強光の下、晴れた青空を背景に華麗な姿で無数に群がり咲いているさまは、この上もなく蠱惑的であった。

しばし花を観察しながら、ミツバチの姿を探したが、結局蜂は一匹も姿を現さなかった。その時刻に花蜜を出さないためかと思い、後日もう一度時間を変えて現地に行ってみたが、やはり蜂の姿はなかった。その後も何回かひまを作っては見に行ったが、今日に至るまでミツバチの訪花は（そのユーカリに限っては）確認できないままである。

### エンジュ（槐）とミツバチ

エンジュが夏季における主要な花蜜提供者であることは、わが蜂達に教えられた。

昨夏（8月の末）、蜂達が弾丸のような勢いで南方の空に飛び去って行くのを眺めながら、射程距離はかなりあるな、と感じたとたん、その方向1000mの五香駅前商店街のところにエンジュの街路樹があり、夏の間は黄白色の蝶形花が綺麗に咲いているのを想い出し、標的はどうやらそこにあるような気がし、直ちに行ってみた。

花はほとんど終わっており、やっと一本だけ白い落花の輪を舗道の上に散り敷きながらなお、咲き残っている樹を見つけた。その花に日頃から見慣れた黒っぽいミツバチが十匹程来ているのを認めた。ひとしきり花蜜を吸ってから蜂達は順次、一旦、上方に飛び上がり、それから北方へ向かって飛び去って行く——巣箱のあるわが家の方へ。付近には小生以外に養蜂家はいないのでわが蜂だったと思う。同時にユーカリに彼女達が行かない理由も判ったような気がし

た。距離が（ユーカリまでの）半分の近さの上、樹の数も269本（松戸市役所緑地管理課）とまとまっており花の数が圧倒的に多いためだろう。さらに花の咲き方も（ユーカリが内向的なのに）こちらは樹の上方に伸びる枝（シュート）に大きな房状の花序をたくさん付けるので、遠方から眼にすぐ飛び込んでくる点もミツバチを呼び寄せるのに有利であろう（図3）。

今夏（8月上旬）も蜂達は昨夏以上の勢い（機関銃の連射のように）で、南方へ飛んで行くのを見て私もその後を追った。エンジュは花盛りであった。ミツバチの姿を見付けるまでにやや時間がかかったが、わが庭で見かける黒と暖色のツートンの色調の個体をかなり見付けた。この色調がわが蜂達のトップモードになりつつあり、ヤタイヤシの花でも見掛けている。エンジュの花で見た蜂達も北方へ飛び去ったので、（昨夏と同様）やはりわが蜂だという印象を受けた。さもなければあの大量の花蜜を、彼女達は一体どこから運び込んで来るというのだろうか？

### 養蜂の難しさ面白さ

カーニオラン種とイタリアン種を初めてペアで並べた夏から数えて今、丸3年目の夏の終わりを迎えた。わが蜂達は忙しげに楽しげに花との対話に余念がない。そして今、彼女達の体色は当初の頃よりもかなり明るさが強まり（尾端に黒色を残す程度に）イタリアン系の血が強まっている。体形も以前より僅かながら大きくなったように見えるが、何より嬉しいのは女王蜂の「這い出し」や、働き蜂の「飛び出し現象」



図3 花盛りのエンジュの花房

がまったくなくなったことである。特に過去3年の夏は記録的な猛暑だった半面、昨年末から今年初めの冬は十年來の厳冬に見舞われ、わが蜂達にとっても試練の連続だったはずだが、それらのハードルを皆クリアーして、順調に育っている。思うに、低温に強いカーニオランの長所と、暑さに耐えるイタリアンの長所がうまく融合した結果かも知れない。

「養蜂の難しさ」とは小生の場合、「病気への対応の難しさ」だといえる。蜂達がひとたび病気になる、もう助からないという厳しい現実を身を持って知らされたあの夏は、初心者である私にいきなりつきつけられた最大の難関に対し、何らかの解決策を早急に打ち出さねばならない試練の時であった。病気の野生というものは哀れだ。彼らは唯々諾々として死を待つしかない…。あの悪夢のような光景に代わって今、夏の日、野生を躍動させて大空へ舞い上がり、再び灼熱の太陽に翅を煌めき輝かせながら満身に蜜や花粉を持って喜び勇んで帰着する様子は、悪戯者の小さな天使達が、空から舞い降りて来るかのような無邪気さである。そうした屈託のないふるまいや、その他四季折々に見せてくれる興味深い習性の数々も、所詮は「健康」という基盤があって初めて保全されるものだという事に思い当たった今、ミツバチを飼養することの奥行き之の深さ、難しさと同時に、その面白さ、また楽しさということが少しは理解できたように思う。

石の上にも3年という。しかし自分では養蜂に奮励努力したという気持ちはない。基本的にズボラな傍観者・観察者に過ぎなかったと思う。それにもかかわらずわが庭の蜂達が年々増加傾向にあるその理由、それは思いつき程度の当方の援助でも消化吸収できるDNAの潜在能力、ひたすら花を希求する勤勉な精神性また環境適応性等々、ミツバチ自身の持つ形而上下に亘る総合的な生命力に起因するものであろう。

（〒270 松戸市金ヶ作 282-43）